

第1回 農林水産物・食品の輸出に係る物流検討会 議事概要

1 日時

平成26年1月24日（金）14：00～16：00

2 場所

全日通霞ヶ関ビル8階会議室

3 議事概要

1. 座長として流通経済大学 林委員が選任された。
2. 農林水産物・食品輸出に関する現状、各事業者の輸出に関する取組、課題について確認した。
 - 農林水産物・食品輸出に関する現状報告
農林水産省・国土交通省より説明
 - 事業者の農林水産物・食品の輸出取引に関するプレゼン
日本通運、日本郵便、ヤマト運輸、全国農業協同組合連合会、日本アクセス、福岡農産物通商
3. 委員からは以下のような意見があった。
 - 今後、アジアにおいては需要が高まることが予想されるため、コールドチェーンの整備は必要。
 - 輸出促進には量的拡大だけでは厳しく、鮮度を落とさない等の質的な付加価値付けが必要。
 - 販路確保、産地間競争、煩雑な貿易手続（検疫、関係書類の整備等）、物流費が嵩む小口輸送、輸出方法の認知不足などの課題があり、政府も一丸となった取組みを期待する。
 - 日本産同士が産地間で競争をしているものもあり、オールジャパンで競うことが必要。
 - できるだけ船で速い輸送、また定温で衝撃のない輸送が望ましい。

- 海上輸送/航空輸送のどちらを使うかについては、商品の日保ち・単価によって決まる。イチゴやモモは航空機による離発着によりダメージを受けやすい。途中で積み替えるのではなく、海上輸送、航空輸送ともにトランシップはなるべく避けたい。
地方の港湾、空港では便数、航路数が都市部より少ないため、都市部の港湾・空港を使わざるを得ないという実態がある。
- 輸送技術については、コンテナだけではなく、一つ一つの箱の中の包装資材まで考慮する必要がある。
- 包装資材については作業性の悪さやそれにかかるコスト等を考慮し、費用対効果があるかを考える必要がある。その上で、多少のリスクを伴いながら進めていくことが必要なのではないか。
- 物流のコストは輸出の際だけでなく、帰りの利用を含めたループで考えておく必要がある。
- 水産物や畜産物などの高単価なもの野菜等の混載により、野菜の輸送コストを下げる工夫をしている。
- 海外でバイヤーと商談が成立しても、どう輸送するのがいいのかわからないときもあるため、物流の情報共有はありがたい。
- 物流事業の観点からは、安定的に物量が確保できれば、物流はやりようがある。
- 物流を通じて付加価値を高めること、コスト縮減を図ることが重要。
リードタイムなど何らかの目標を共有してはどうか。

以 上

(文責 事務局)